

ポーランド共産党への公開状『反官僚革命』 に対する疑問

SECT
No.7

この本を読みつゝ思い出したのは、当然ハンガリーであり、チェコであった。東欧における自由派と称する資本主義者と、ナシヨナリズムに立脚したスターリニストそして反スタの旗を掲げて道化役者よろしく登上する真正ボルシェビキの面々である。一体何たが反スターリズムとか革命的マルクス主義とか叫ばれ、この共産主義と言う未来の支配者達の原則的かつ真摯な問いかけが行われた事か。たぶんスターリンの流した冬宮攻撃の夜の涙は、クロンシュタットの水兵のそれと同じ様に見えた事であろう。タダニスクの労働者諸氏、市民諸氏も又幸にも反乱が成功！ワルシャワ広場で新国家Vの宣言を発したとしたら、いかに感動的演出をしようと吐き気とも、しらじらしさともつかない嫌悪しか私は感じないであろう。

だから、生産の階級目的をいかに模索しようと、中央集権制にいかに対峙しようと、権力志向型の社会変革は一切信用出来ない。彼らの批判の正しさ、かつ一つのたき台としての提案の鋭さは満足出来ても、人民の真の「代表」と名乗りをあげてる限り、ガリー船の下司の、

口先きの出まかせとしか思えない。
党の形態、生産投資の方針をいかに変えようと、プロレタリアン党V独裁である限り前衛としての司祭の座が待ち受けている事であろう。

プロ独一過渡期論を、自主管理のイメージでとらえている様に思ったが、彼らは、労働の本質をとらえていない必然として、生産技術労働における自己を明らかにしていない。工場評議会下の分権複数指導体制において、「技術」そのもののさえ、労働行為にしなければならぬのではなからうか。余剰生産部分の官僚テクノラートによる消費、あるいは、投下資本の偏向、部門別計画経済の限界への批判は全く正しい様に思う。(先進資本主義においても権力は資本家地主の旧パターンではなく、大衆資本を集約し、金融資本をバックとした官僚型政府であり、巨大な国家機能はイデオロギー支配ではなく、技術管理なのです。)しかし、彼らの官僚テクノラート支配に対する批判は「官僚的」側面に終始し労働者分権下において、技術及び技術者がいかなる立場

性を持つのかを、示してはくれない。知識が少々ある者がなぜ他人より上位にランクされるのか、それが分らない。共産社会に向う過程で、「技術」近代文明がいかに止揚されていくのか、今様練金術V近代技術になぜ固執するのか？

古い形のプロ独は、単一党軍警支配であったが、現在の東欧疑似労働者国家群では、生産点のテクノラートが官僚と伴に労働者を支配している。それに対して、即時に工場評議会自主管理を設定しても、テクノラートに対しての知識応用技術Vと言う規定では、官僚党の政治行為に対しても社会工学としての政治技術論しか批判出来なかった限界に達するであろう。政治「技術」による社会支配総体ではなく代表制全国党支配の「技術」に対する批判の限界と同じ様である。

中共スタリニスト下の工場での生産活動等その典型である。労働者の労働行為と政治活動をその双方とも商品価値として評価し、労働者が、政治テクノラートの党活動下に組み入れられ、生産活動でのテクノラート支配人同一化されている。又、民兵組織と言う、生産点防衛活動も、一見反軍官僚的に見えるがその無階級軍隊の内実はどうであろう。兵器の機械化、軍組織の巨大化、広域

軍事戦略下において、軍事力の小人数技術化(ミサイル軍事ブロック)と、国民皆兵的な、教育機能の二つの「軍」の分離は不可避であろう。

民兵制人民戦争と言うのは、一見個の主体的生活性に立脚したテロルの回路の表現の様だが、所詮軍と言う、全体性の機能であるし、露骨な洗脳機関にすぎない。軍事専門家及び軍事指導者の位置はどうなるのだろう。

自主管理を貫徹するヘゲモニーを、労働の質を変化する事なく、テクノラート存在のまま、設定するならば、非テクノラート側の階級解体になる。生産拡大が共産化ではなく、労働の質の変化相互扶助による共同性を持った労働行為を媒介とした自己と他者Vこそが共産化である事を踏まえて、技術所有者の行為と非所有者の行為の特殊性を止揚する物が、量の拡大ではなく、労働主体の変革である事を再確認すべきであろう。それは、自主管理労働権の奪還は、あくまでも個人の利己的特殊性欲求を満たす労働ではなく、類的な社会性を媒介とした自然への働きであってこそ、その労働生産の人間性、合自性を持つのであり「労働者国家」維持が自己目的化される事でもない。労働者分権下余剰価値のさらなる拡大分配が、生活水準の上昇に奉仕しその過程で、労働の本質が水泡の様に消え去るのが恐ろしい。労働の生産

性の増大の中で労働の価値は、技術に奪われ、個人の意志はその自己表現としての労働から、抽象的な欲求と労働が交換される技術そのものの支配下に落ち込められる。だから、技術と言ふ一人歩きの近代文明の怪物とその子テクノラットが、労働の中でいかなる地位占めているか明らかにせず、即時に生産性向上のためコントロール出来る過信するのは、危険なのだ。それ故、政治テクノラットと、技術テクノラットの新しい支配しか、この批判書では生れないと思うのだ。

カレン民族小誌

②

岩 永 文 夫

視之不見名曰夷

聴之不聞名曰希

搏之不得名曰微

比三者不可致詰

故混而為一

これをみれども見ず、名づけて夷（無色無形の意）と言ふ。これをきけども聞こえず、名づけて希（無声の意）と言ふ。これをとらえんとすると得ず、名づけて微（極小の意）と言ふ。この三つのものは以てちきつ

自主管理の方向性は「労働の意志」であり、ボルシェビキの「ソビエト権力と、電化」と言う唯モノ主義では断じてない。ユートピアとは、ただ量において、豊かなのではなく、自分の作り出した皆の小さな宝を相互に、分かち合う喜びではなかるうか？

何やら、物が沢山手に入る様を宣伝をし、天下が欲しいと言わんばかりの、政治テクノラットの予言はどうにも不快である。

（推理するの意）すべからず、故に混して一となす。——すなわちこれが道である。

老子の考える「道」の働らきについて書かれた第十四章は右の文章ではじまる。ある人は老子は中国生れてではなく、中央アジアの月氏国の人らしいからエホヴァという三音をかくして書いた、そして関（函谷関）を出て西方の故郷へ帰ったという。これは引用文の始めの三行にある夷、希、微の三字は中国音でイ、ヘ、ウェイとよむが「イヘウェイ」の音は「エホヴァ」キリスト教の天帝の名に通じ合言葉としてかくして入れたというものであ

るが疑問である。老子の生地を西方とし、ユダヤ教のカップラ宗と関係があるとする説もある。確かに老子は中国思想に大きな足跡を残しながらも一書を著わしただけで、詳細は全く知られていない。ために諸説紛々定まることを得ず、随分と雄大な仮説を受け入れる余地がある。その独得な思想また李という姓から推察しても秦漢民族でないことは確かなことと思える。老子とは老いた子先生という敬称であり、老師匠の意であるとされているが果してそうであろうか。私は老子とはラオ族の偉大な師という意味だと思ふ。ラオ族はタイ族の一派で元来、揚子江流域に住んでいたのが漢民族の圧迫によって次第に南下し現在では東南アジアのラオス・タイに居住するようになった。東南アジアに現存する殆どの民族は昔、中国から南下してきたものであり、タイ・ラオに限らずカレンもまた同様である。なおこの南下は現在も続いている。タイ・ラオ族等とカレン族との歴史関係はいずれ触れねばならぬ問題だが今回は省略する。紀元前のラオ族の師老子の著書のなかにエホヴァという名前があったことは興味深いことだが、これは偶然のなせるわざであろう。しかし、紀元前にアジアに居住する民族とユダヤ教との交渉がなかったと言ふことはできない、今回のテーマであるカレン族の伝承と宗教が旧訳聖書やユダヤ教

と一致する箇所を多く持つことが私には何か示唆を与えているように思えてならない。カレンの口碑は書かれざる聖書であると言われている。ター・リ・バ・ユワ父なる神の詩の本といわれる叙事詩は父なるユワ（神）と三人の子供達ウェ・コエ（カレン族の祖）バ・ケル・タ（ビルマ族の祖）ブ・タ・ダー（白い弟）の物語である。この詩の中でリトリセイという聖書をウェ・コエは持つことを嫌い、バ・ケル・タは森の中に置き忘れたがブ・タ・ダーはそれを持って西方へ消えてしまった。いつか白い弟ブ・タ・ダーはその聖書を返えしに来なければならぬという伝承がある。それ故にキリスト教の伝承を他の民族と異なった目で見た。東南アジアの諸民族の中でキリスト教徒が多いのはカチン族と並んでカレンであるが、その理由としてかなり先験的に彼等の伝承が作用していると思ふ。英語のクリスチャニティと言えば一番適当だと思ふが、カレンにはキリスト教的なものを受け入れる思考様式があるといえる。そのすぐれた芸術性とモラリティの高さが何故かキリスト教的要素を組み込んでいるのだ。しかしながら彼等はクリスチャニティ（キリスト教的性格）はあっても全くのキリスト教徒とはいえない、その多くの場合はアニミズムを信じており、ごく少数だが仏教徒もいる。タイの西部やビルマ

東部に住んでいるカレン族はタラク・レケ・トールウェイなどの土俗信仰を持っている。タラクという信仰は一種のタブーで豚や鶏の後に随いて歩くことが禁じられている、またレケは「アリヤ」なる神の出現を待ち望む信仰であたかもユダヤ教のメシア思想のようなものである。カレン族には書かれた歴史はない。しかし、興味深い伝承を沢山残している。それらは世代から世代へ大古から伝わって来ている口伝の歴史である。ビルマ・タイ・トンキン湾・どの地方のカレンでもこの歴史は殆んど誤まらずに伝えられている。歴史はティ・セ・メ・ユワ（永遠の河）とティ・ラー・カウ・ラー（常緑の地）と彼等が呼んでいる土地に住んだ神とその創造物によって始まった。その時代は食料不足と他の圧迫によって彼等七部族は南方へ分散しながら移住をせねばならなくなるまで続いた。カレンの伝承は多くの歴史的事実と同時に未来の予言をしている。いつの日か彼等七部族が最終的に結集する栄光の時がくるであろう、そして平和と富が世界を治める。このような大きな予言ではなくとも、カレンには詩の形式をとった予言がいくつもある。それにはラジオ・飛行機、汽車などの発明、発見も含まれている。カレンは全く詩を愛する人々である。彼等の多くは文盲ではあるが、幼少の頃から詩の暗唱と吟唱の仕方を教わ

る。子供達が10才以上になると男女とも多くの場合、韻を踏んだ二行連句の詩でおたがいに話をする。若者が乙女を恋した時はいつも詩的な言葉で彼女に話しかけ、彼女は同じ方法で彼の申し出に答えねばならない。もし彼が彼女の気に入られるためには、圧倒的な量の詩を並べて彼女に口を開かせる暇を与えなくするのが一番なのである。これはアジアの民族の多くが持つ特色でミャオ族（苗族）の場合は祭りになる隣村に若者は出かけて行き、乙女を訪い、恋の歌い手となる。語り合うことは稀で、彼らは自分の気持を歌で表現する。ミャオ族の一例を挙げれば「お前のくれたこの布、一生涯捨てないだろう。それを身に着ける時は、私はお前と共にあるだろう。この世に命のある限りお前のところに立ちもどらう。死ぬようなことがあれば、私の魂はお前のまわりを漂うだろう。」そして乙女は応えて歌う。「あなたのくださったこの首輪、眺めるたびにあなたのことを想いましょう。誰かが果実を二つくだされば、一つだけ頂きましょう。二杯の水をくだされば、一杯だけ頂きましょう。あなたに抱かれたあの時から、私の魂は雲の中や地の上をさまよいません。あまりの幸せに死ぬほどの心地です。」このような歌の感想を人里離れた山中のミャオ族の地で、虎や（野性の）水牛、熊や象の、今なお住んでいる処女林

を、夜が覆ったところ聞かれる歌なのであると、オースト

の詩の吟唱を聞いてびっくりした。

リアアベルナツィークは観じている。カレン・ミャオに限らず、万葉集・風土記の昔から、歌垣があり、そして恋歌のやりとりは最近に至るまで日本にもあった風習である。カレンは恋だけでなく予言、伝承などの他にも殆んど日常生活にまで詩がとり入れられている。カレンをとり巻く民族は、長髪できれいな声でいつも歌っているカレンを女性として見る。モン族がよく使う言葉に「神が創った姉がカレンで、弟がモンである」というように。カレンの詩は全て厳密に記憶されている、あたかもそれはユダヤ人が詩篇を伝えるのと同様に、世代から世代へ絶えることなく続き、歌や民謡として用いられている。

このようにカレン族の宗教的・文化的性質を見ると、もしかすると彼等はあの消えてしまったイスラエルの子孫の一族であるかもしれない。多くの予言が古代から伝えられた歌に含まれている。白人の出現（カレンの弟Ⅱブ・タ・ダー）・鉄道・蒸気機関など多くの近代科学の発明発見物がカレンの昔の歌のなかで予言されている。さらにもっと新しいラジオや飛行機の出現まで予言している。予言は二連の詩句からできていて、たとえば次のようなものである。

それらの詩の幾篇かは「創世記」のテーマを含んでいる。またカレンのユワの偉大な事業を賞めたたえている詩はまるでヘブライのヤウエを賞讃した旧訳聖書の詩篇によく似ている。ここで注目すべきことは、カレンの神ユワハヤバロVと、ヘブライの神ヤウエハヤバロVの

ラッパの下に石がついている
空気によって細長い棒が話をする
日本語に訳してしまおうと何の変哲もなく、おもしろくもない、短文になってしまおうのは表現力の無さ故で御了承を得たい。ラッパとはラジオのスピーカーを意味するものであり、また飛行機については次のように予言されている。

発音の類似だろう。（類似というより同一と言った方が適当だと思うが）イザヤ書の予言に非常に似ている予言もある。百五十年ほど前、アメリカの宣教師がビルマで初めてカレン族に会った時、まるで聖書から切り抜いてきたような神とその創造物、そして悪魔などについて

ウフサは多くの奇妙な事柄を伝える
ウフサが伝えるいろいろな事柄には奇妙なものがある
女性が海を渡るといふことを聞いた
女性が海を飛び渡ることを聞いた
稲妻に乗り、風に乗ってやってきた

羽根で飛ぶカニに乗ってやってきた
長い管を目鏡のように目にあてて

カニに乗って、^{ムカデ}百足の卵がかえるのを見た女性が飛行機を操縦して海を渡ってくることを予言している羽根のはえたカニとは飛行機のことであり、ムカデとは汽車のことである。卵がかえるとは乗客が降り降りする様を予言しているのである。これが東南アジアの一角で近代科学と触れることもなく生活していた民族の昔からある予言であるとは驚くべきことである。もう一つ飛行機について語っている詩を挙げてみる。

空は遙か上方にある

たとえ鳥の黒い羽根が白くなるまでとんでみても

鳥は決して空に達することはできない

空に達することが出来るものがたった一つある それは空とぶ星である

それはアチラにもコチラにも高くも遠くへも飛べる大空に夢を駆せたのは人類すべてに言えることかもしれないが、こんなに具体的な形で表現をした例は見たことがない。

ところで彼等が神とその創造物すなわち創世紀に関して、いかなる考えを持っていたのか詩でみてみよう。

①

「サウ」は竜のようになり悪魔と斗うだろう

以上四つの詩はカレンの創世記伝説であるが、①はまさに天地創造を語った詩である。②はアダムとイブの物語と殆んど同じと言って良いくらいに似ている。③は唯一神を賞讃した詩である、彼らはアニミズム・タブー等の原始的な信仰と唯一神「ユワ」との二種の宗教的特徴をもっているが、これは彼らの未開性の問題ではないと思う。この点を研究することは大きな意味があり、今後の研究課題の一つである。④は悪魔無信仰ないしは異教徒が、神を信ずる人に斗いをしかけてくるというのが大意であるが、この詩は最後の審判の話である。始めは悪魔無信仰な人間が神と海で斗って勝つが最終的には神が勝つ、信仰心は厚いが弱い人を「サウ」と言った。なお海では神が斗いに負けたということはカレン族が山地民族であることを暗示している。

ガリレオやコペルニクスが四〇〇年で地球は^{アール}周って回転していることを歌っている詩をカレンの発音と並べてカレン族は昔から知っていた。地球がまわってくて自転していることをガリレオやコペルニクスが気づく前に、昔から知っていた。これをカレン族の発音にしたがって書く

ハウ コ ブレー レ ディ マウ ケ

昔、地球は神によって造られた
その生命は神によって左右される
昔、地球は神によって造られた
食物も水も彼が造った

②

誘惑の果実は食べることを禁じられている
それらは熟れて大地に落ち腐って無駄になる
誘惑の果実は食べるべきでない
それらには毒があり、我々の母を殺した

③

神は生きつづけてきた

たとえ我々人間が死んでも彼は死なない

神は親切で慈悲深い

彼はさらに生きるであろう

④

悪魔が神に斗いをしかけた

悪魔はメコン河とサルウィン河の上で足を踏んばった

悪魔は神を海の中に投げ入れ

神がたち上がった時には逃げ去っていた

悪魔が斗いに勝った

神は大地をけとばした

しかしいつか神が悪魔を押えつける時

クボ タ オ フボ タ ロ クウェ

ハウ コ ブレー レ ディ ソクワウ

フボ タ オ フボ タ クワ カウ

(カレン語の発音)

地球はこまが回るように回っている

まるで子供が一日中遊んでいるように

地球はまわく、そして紡ぎ車のように回っている

まるで子供が一日中あかず見とれているように

このようにカレン族は無数といえる詩句によって、地上はおろか天界まで描いている。

カレン族にとって七部族が再結集をするということは大問題であり、非願である。彼等は故郷もなくさすらう民族と自らを規定しているが、確かに伝説によれば彼等の歴史は数千年にわたって流浪の生活の歴史である。

昔、我々は共に同じ河の水を飲んだ

今、我々は散らばりさすらっている

あちら、こちらに分かれて山脈を登り

あらゆる所に分かれて山脈を下る

我々が十匹の犬の頭が吠えるのを聞く時

我々の同胞は皆最終的に再び集まるだろう十匹の犬の頭が吠えるとは福音が鳴り響くことである。この詩の意味は大昔から現在まで世界のあちらこちらに分散してい

るカレン族は神の福音が広まることによって再び集まる
ことができるということだ。メコン河の東側の人間と西
側の人間とがいつか会うだろうという古い伝承がある。
フランス領インドシナ（ラオス・ヴェトナム）のカレン
族とシャムやビルマのカレン族が再会できるのは、サル
ウィン河の支流タン・ユイン川の岸からサルウィン・メ
コン両河のそれぞれの川岸まで道が創られた時である。
それらの流れは以下の詩のように流れている——

メコン河がもしなかったら
兄妹達は一所に暮らせただろう

メコン河がもしなかったら
姉弟達は一緒に暮らせただろう

タン・ユインからサルウィン・メコンに道路が通じた
とき

サルウィンから来た兄妹達はメコンの彼方の人達と結
婚できるだろう

魚達はサルウィン・メコンの水源へ泳いで行きまた戻
ってくる

孤児達は魚にわなをかけ竜を捕らえる
カレン族の言う所によると、メコン河とサルウィン河は

彼等がノル・ロール・ノル・シェと呼ぶ同じ湖に水源を発
している。タン・ユイン河とサルウィン河の間に道がで

きそれからメコンとの間にも通じる時代がくるだろう。
その時にはメコンの東側のカレンは西側のサルウィン河
やタン・ユイン河の流域に住んでいる同胞と交渉できる
というのがこの詩の大意である。カレン族の詩で孤児と
いうのは常に自分達を示す、竜とは神の恩恵ないしは力
を意味している。右の詩の意味をさらに補足するのが次
の詩である。

サルウィンとメコンの源には

あらゆる種類の魚が住んでいる

メコンとサルウィンの水の中には

いろんな種類の魚がいる

多くの種類の魚というのは神の福音から見離された両河
の峡谷に沿って住んでいる多くの山岳民族を意味する。

カレン族の宗教家はそれらの山岳民族を啓蒙せねばなら
ないという使命を持っている。これらの例挙げた詩は西
洋かぶれや西洋教育を受けた連中の創作では決してない。
大昔からカレン族の持つて生まれた全くに優れた伝承で
あることをも知らずに父から子の代へ彼等は貴重な文化
遺産を伝えていたのである。既に日本人には失なわれて
しまった大切な資質、失なうまでもなく変形をよぎなく
させられてしまったこれらの芸術的伝承の価値を痛切に
感じさせられる。

このようなカレン族の伝承とキリスト教・ユダヤ教との
近似は前号にふれたカレン族の出自をバビロニアとする
ことでなんらかの関連があるかもしれない。しかし重要
な問題点はその近似によるキリスト教のカレン族に対す
る滲透である。これによって彼等の文化遺産が浸蝕され、
生活様式が変化を求められることによって、とりかえし

野 火

和田春樹著・中央公論社刊

『ニコライ・ラッセル（上）』

Ⅱ 国境を越えるナロードニキⅡ

日露戦争末期、日本全国三〇カ所に設けられた捕虜収
容所に、七万人のロシア人が収容されていた。その将兵
にツアリズム打倒の革命思想を宣伝し、のち「在長崎露
国革命党首領」といわれた人。これがドクター・ラッセル
である。

本書はラッセルの生涯を克明に発掘した貴重な伝記で
ある。ラッセルをつうじて、日露戦争とロシア革命運動
ロシア革命・ロシア人革命家と日本人との関わり、そ
して戦争と革命という問題、解放への国際的連帯の実態
が鮮かに描き出されている。幸徳ら平民社の運動も、そ
の新たな視点から分析評価され、従来見ない豊富な資料

と共に感慨深く読まされる。

著者はロシア史専攻の気鋭の学者で知られるが、職務
と平和運動の御繁忙の中で、東奔西走、資料を調査読破
され、この大著を完成された。心から敬意を表し広く江
湖におすすめ申し上げる次第である。
(萩原)

◎アナキスト同人誌『イオム』創刊

昨秋、高島洋詩集出版祝いで阪神のアナ連残党十余名
が一杯呑み、何か出そうか、という事になり、このイオ
ムが出た。河本乾次、平山房子、滝沢昇、向井孝、高島
洋の随筆、山口英の詩、バクーニンの論説を掲載。

神戸市葦合区上筒井通八一二二一六前田方。一部百円
リベルテール誌同様諸姉の支援を願いたい。

◎『中国』倒る

ユニークな雑誌『中国』は昨年12月号で休刊になった。中国の会はまだ続いている。同誌昨年2月号に、「前半生をアナキストとして活躍した劉師培の「亜州現勢論」が載っている。中国人アナキストの描いたアジア解放ユートピア論だ。日本の朝鮮支配が完成に向う過程を、彼は列強の「新しい憲兵」が出現したと述べた。この論が書かれた三年後に日韓併合が強行されたのである。

◎共同謀議、無政府主義集会を開く

四月二十八日一時から中京大学内で「無政府主義集会」を開く。主催は「共同謀議・無政府主義研究会・伊東」

◎喜多方の同志苦斗

郵政省は六三二六名の大量不当処分を発令、福島地区では停職・減給・戒告計一四五名、喜多方支部では二七名の処分が発令されている。全通喜多方地方は四月一日以降無期限の時間外労働拒否と違法サボに入り、二四二六〇二八日連続ストに突入する態勢を整えた。

一七日には全国統一行動耶麻地区大集会を開いた。福島事件発生ゆかりの地である。病弱と生活苦に耐え斗争を続ける新明は訴える。「俺は八方フサガリ、生きてるのか死んでるのか訳のわからない日をすごしています。御健斗を！御自愛を切に！」と。激励とカンパを左記に

福島県会津喜多方市菅原町天満前八九一二 新明文
◎弥栄共同体のその後

島根県に尾関弘らの設営した共同体は、島根新聞に「過疎地こそ生きがい」のタイトルで大きく報導された。

キャンプには延べ三六名参加。阪工大や松江、島根等からアナキストが数名きたが絶対少数。尾関は「今後とも社交辞令じゃなく、本心からの御協力、御指導、アドバイスを。そして更に更に圧倒的連帯をお願いします」と叫んでいる。彼らは機関紙「備北通信」を発行した。大阪市東成区玉津二、東成玉津郵便局留「備北百人委員会」一部五〇円。同志の支援を願う。

◎大杉のエス協創立に疑念

関西エスベラント連盟の宮本正男が、「大杉のエスベラント協会創立というのは少々おかしいので、訂正の文章を書こうと思う」という。ぜひ報せてほしい。

X X X

以上受領文書の大要略記、不得要領御詫。ハギシン

人類更生の大道、無政府主義研究書。送料当方もち

八太舟三著	大杉・朴烈ら十二氏著	二〇〇円
純正無政府主義（農村社会革命講座）	反逆者の半蔵手記	一五〇円
階級闘争説の誤謬	和田久太郎著	一三〇円
無政府主義と人類解放の道	黙想から 増補版	七〇〇円
マラテスタ著	古田大次郎著	一〇〇円
無政府主義組織論	死刑囚の思い出 増補版	一〇〇円
選挙戦に際して——付略伝——	天皇制破壊への動向 訴訟記録I	二〇〇円
農民の中へ	——II——二皇居発露事件	一五〇円
石川三四郎著	鎌倉雄高氏の天皇制批判の証言収載	一五〇円
マフノの農民運動	鎌倉雄高氏の天皇制批判の証言収載	一五〇円
井証法の唯物史観の批評	大杉栄・望月桂・共著	一五〇円
進化と革命（ルタリヤ著）	漫文・漫画	一五〇円
無政府主義とサンジカリズム	権藤成卿著作集第一巻	一五〇円
ペテルロー著 山鹿泰治訳	自治民権	一五〇円
平民の鐘——無政府の福音——	自治民権	一五〇円
岩佐作太郎著	黒色戦線社編集	一五〇円
無政府主義者は答える	黒色戦線社編集	一五〇円
革命断想	黒色戦線社編集	一五〇円
石川三四郎ほか三氏著	黒色戦線社編集	一五〇円
日本無政府主義運動史 第一編	黒色戦線社編集	一五〇円
近刊	黒色戦線社編集	一五〇円
権藤成卿著作集2農村自政論、3君民共治論、4自治民権、5日本農制史談（発禁）、血盟団、五・一五、二・二六七の後にくるもの、パンフ等、6南洲書、柳子新論、7八郡通勝攻、8日本震災凶禍攻、9間々子詩、10補遺	黒色戦線社編集	一五〇円
発行所	黒色戦線社	一五〇円
〒三七二 群馬県伊勢崎市中和田 大島英三郎	黒色戦線社	一五〇円
振替宇都宮 一一〇一五 大島英三郎	黒色戦線社	一五〇円